

「田中穰氏旧蔵典籍古文書」所収の記録類について

Introduction of Historical Documents

高橋秀樹

はじめに

明治（昭和初期）の代表的書籍収集家で、考証家でもあった田中教忠（一八二八年生、一九三四年没、四代目勘兵衛とも称す）が所蔵していた古文書・典籍類は子息忠三郎、孫穰氏の手を経て国有に帰し、現在その大部分は「田中穰氏旧蔵典籍古文書」（以下、田中本と略称）として本館の代表的資料コレクションの一つとなっている⁽¹⁾。その内容は古記録・古文書・編纂物をはじめ、聖教・絵画・和歌集・散文作品など極めて多岐にわたっており、しかも善本が多いという点で日本有数のコレクションと言える。田中本の中には学界周知の史料として活字本の底本に採用されていたり、東京大学史料編纂所によって影写本・謄写本が作成されているものもあるが、その全貌はこれまで一般には知られていなかった⁽²⁾と言っても過言ではない。田中本が本館の所蔵となったことで、存在こそ知られていたものの内容については十分知られていなかった『醍醐雑事記』『春記』⁽³⁾、未知の『永祿六年北国下り遣足帳』『六条八幡宮造宮注文』⁽⁴⁾などが史料紹介され、周知の史料についても『令集解』『延喜式』の書誌的な調査が行われるなど⁽⁵⁾、田中本に対する関心はつとに高まっ

ている。

本館では現在、田中本の史料調査作業が進行中であり⁽⁶⁾、多様な田中本の全貌を直ちに明らかにすることは出来ないが、調査が終了した記録類（便宜上、古文書・経典・韻文散文作品・絵画資料を除く、日記その他の史料を、ここでは記録類と称することとする）について、ここに紹介したい。一点ごとの書誌的データや内容については本誌掲載の田中本調査団『田中穰氏旧蔵典籍古文書』所収記録類目録⁽⁷⁾をご覧ください。また、本稿では田中本が田中教忠によって収集された史料である点を鑑み、各書籍の旧蔵者に着目して、田中本記録類の全体的な傾向について述べておこう。

なお、行論中の書名のあとの（ ）内の数字は本館における田中本の通番号および枝番号である。

① 醍醐寺関係の記録類

醍醐寺に旧蔵されていたと見られる記録類が四〇点以上に及ぶ。文書類にも醍醐寺関係のものは多く、また、旧蔵者が現在のところ判明して

いない真言系の記録類の中にも醍醐寺旧蔵のものがあるだろうから、醍醐寺旧蔵の史料群が田中本の中核を占めることは揺るぎない。法衣用織物を扱う呉服太物商服紗屋こと田中家は醍醐寺の院家三寶院とも関係が深い家だったらしく、教忠の父三代目勘兵衛孝通以来醍醐寺の近隣日野に別宅（角坊と称す）を構えていたこともあって、教忠はしばしば醍醐寺の蔵に出入りし、明治三〇年代の終わり頃から四〇年代にかけて古文書・聖教の整理を行った¹⁾。そうした関係から、醍醐寺の文書・記録類の一部を彼が譲り受けたものと見られる。

醍醐寺の文書・記録類には寺蔵のもののほか各院家蔵のものがあったと思われ、川瀬一馬氏は教忠が理性院の書籍を一括購入したことを紹介されているが、現在田中本として伝来している醍醐寺関係の記録類には印記がほとんどなく、筆者の経歴やわずかな手がかりから旧蔵していた院家を推測するしかない。したがって理性院旧蔵と確定できるものも少ない。その中で理性院旧蔵と見て間違いなさそうなのが室町時代後期の院主光祐筆の『後柏原院御茶毘記・覚道法親王御外界御中陰記』(100)、同じく院主蔵助筆の『蔵助往年記』(316)、『室町殿護摩日記』(220)、『万供』(315)、『三寶院法流嫡末等事』(347)である。『蔵助往年記』は蔵助が自身の日記を抄出したものに幼少時の経歴を書き加えたもので、『改定史籍集覽』『統群書類従』に翻刻されている。『改定史籍集覽』の奥書には「東京帝国大学所蔵の蔵助僧正真蹟本」を底本としたとあるが、田中本『蔵助往年記』こそ蔵助自筆であることは動かないだろうし、また東京大学からの流出本とも考えられないから、『史籍集覽』の編者近藤瓶城の奥書には疑問が残る⁹⁾。万里小路時房の日記『建内記』の抄出本である『万供』は理性院関係書状の裏を利用して書写されており、筆跡も蔵助のものと思われる。奥書の署名に当たる位置に「任序」とあるが、これは筆者の人名と見るより、「ついでにまかせて」という意で記されたものだろう。

教忠と関係が深かったといわれる三寶院旧蔵の記録類としては、『三寶院義賢准后御入室御得度略記』(251)や三寶院院主義演が理性院覚助書写本を演増に命じて写させた『高雄山寺大師御灌頂記録』(173)、『帝系図』(453)がある。『帝系図』は、内閣臨時修史局（現、東京大学史料編纂所）が影写本を作成した明治二〇年（一八八七）には三寶院に所蔵されていた。宝池院宛て書状を紙背に用いる『摘要日記』(253)も三寶院との関係が想定される。また、『義演准后日記』慶長元年（一五九六）閏七月二〇日条に「承久仁王経法記今日写功了」とあるのは、承久元年（一一一九）二月に行われた仁王経法について記す『高陽院仁王経法記』(415)を入手して書写したことを指すか。三寶院旧蔵本かどうかは不明であるが、義演が『醍醐寺新要録』の中でしばしば引用している書目に『醍醐寺有職補任』(137)、『醍醐寺座主次第』(134)がある。このうち『醍醐寺座主次第』には憲隆なる人物による明治一八年（一八八五）の修補奥書があり、『雑々秘要集』(7)にも同じく憲隆の修補奥書がある。醍醐寺の寺誌『醍醐要書』(138)の表紙には「持宝王院」と記されているが、持宝王院という院家については未詳である。

醍醐寺の有力な院家の一つである報恩院の関係者が記したものに『報恩院源雅記』自筆本(432)、隆僊筆の『修正仏名日記』(237)、隆源筆の『八幡宮愛染土御修法記』(241)、隆宥筆の『醍醐寺根本僧正略伝』(344)、教舜筆の『後七日法』(413)がある。ところで、「享禄三年記」と題されている自筆日記(432)について、川瀬一馬氏はこれを「山科言継筆」と見ている¹⁰⁾。しかし内容は明らかに僧侶の日記であり、山科言継の日記とするわけにはいかない。この日記の正月二日条に禁裏・同女房・近衛家等への詳しい年始贈物記事があるので、近衛家当主尚通の日記『後法成寺閔白記』(41)の同日条を見ると、「自報恩院久喜二桶・梅漬一器進上之」という記事があり、「享禄三年記」と品目・数量が一致することから、このことより「享禄三年記」が醍醐寺報恩院主源雅の自筆日記であること

は明白である。

ほかに醍醐寺の院家旧蔵が明らかなものとしては、「松橋蔵」と表紙に書かれた無量寿院旧蔵『堯雅大僧正自筆之記』(11)がある。また、『醍醐寺地藏院経蔵佛像目録』(246)は地藏院旧蔵と見てもよいかもしいない。この『醍醐寺地藏院経蔵佛像目録』の紙背は鎌倉時代中期の醍醐寺座主職をめぐる相論関係文書で、その内容も興味深い。

醍醐寺関係の記録として、『醍醐雜事記』が鎌倉時代前期写本・鎌倉時代中期写本・観心三年(一三五二)写本の三種が伝わるほか、奥書に醍醐寺において書写したことや、醍醐寺関係の院家、僧侶の名が記されているものも多い。個々の史料については本誌掲載の『田中穰氏旧蔵典籍古文書』所収記録類目録を参照されたい。

田中本の未詳真言系書籍を含め、醍醐寺関係記録類は醍醐寺に現蔵される文書・書籍類と合わせた考察がなされてはじめて、その位置付けが行えるものだろう。醍醐寺聖教調査の進展と成果の公開によって、田中本との関係についてもさらに多くのことが明らかになることを期待したい。

② 他の寺社系記録類

ここでは醍醐寺以外の寺社記録類を取り上げることしよう。印記があることで明確にわかるのが高山寺旧蔵の記録類である。「高山寺」の朱方印のあるものが一点、「方便智院」の朱方印のあるものが八点、いずれも鎌倉時代以前の書写にかかる善本である。空達房定真によって開かれた院家、方便智院には多くの記録類が伝来していたらしいが、その廃絶とともに明治時代初期に流出したものも少なくない。その一つに天武・持統天皇合葬陵である檜隈大内陵盗掘事件の実検記として著名な『阿不幾乃山陵記』(455)がある。その内容は教忠の師谷森善臣の見解を

抑えて野口の王墓から見瀬丸山陵に改定された安政の陵墓治定を覆すもので、教忠は殊なる思い入れをもって『阿不幾山陵記備考』(455付属)を著し、檜隈大内陵の考証を行っている。その中で、教忠は『阿不幾乃山陵記』入手の件にも触れている。それによると、明治一三年(一八八〇)六月一三日に高山寺に赴いて住職錦小路証成より入手したのであった。同じく、『方便智院者柵尾一院也、今為廃寺』とあり、『方便智院聖教目録』⁽¹³⁾には「件東之聖教其跡廢絶之間、被移石水院西経蔵畢云々」との奥書もあるから、廃寺となった方便智院の書籍はそのころ高山寺石水院西の経蔵に置かれ、高山寺住職の管理下にあったのだろう。他の高山寺(方便智院)旧蔵書も多くはこのように教忠が直接高山寺から入手したのかもしれない。教忠は勘文を付して『阿不幾乃山陵記』が定真の筆になることを所蔵の『法界次第』(407)『寛信大阿闍梨東寺拜堂記』の筆跡との比較から鑑定している。蔵書中の定真筆の記録類には『後七日諸事』(15)『血脉』(420)があるが、『寛信大阿闍梨東寺拜堂記』は現在の田中本の中に見えない。なお、『高野三股由来記』(260)『尊勝法御修法記(久安三年日記)』(419)『代々長者舍利勘計記』(442)は『国書総目録』(岩波書店)が『方便智院聖教目録』によって高山寺方便智院聖教として掲げているものである。

仁和寺関係では、心蓮院の蔵書印^(種)が捺された『文集』(457)、尊寿院の蔵書印が捺された江戸時代の日記『未詳記』(246)がある。『文集』には『本朝文粹』『本朝文集』など既知の文集に載せられていない文書も収められていて興味深い。『未詳記』には尊寿院の印のほか「法住庵」の印も捺されており、同じ印が『理趣経勧請并回向等用意・法皇御伝』(14)にも見える。

『二品法守法親王御灌頂記』(224)『山門根本中堂供養記』(406)『円融院御灌頂雜事記』(417)には「鳴滝図書記子孫永保」など「鳴滝」と記された蔵書印が捺してある。「鳴滝家」ともあるが、文化年間の法眼幸

寛の修補奥書があるから、寺院あるいは坊官家の旧蔵書と見られる。「鳴滝」というと、仁和寺子院の般若寺あたりが思い浮かぶが、どこの寺院のものか今のところ明らかに出来ない。

『表白集』と題される本は多くの寺院に所蔵されており、特に高山寺本・醍醐寺本などが著名であるが、多数の表白を収集している点で他に類を見ないのが東寺観智院所蔵の『表白集』である。もとは二帖からなっており、現在は第四が欠けていて一帖が残されていることが報告されている¹⁴。実はその欠失分の第四が田中本の中に伝わっている。『表白集 第四』(261)がそれで、旧蔵者を示す識語・印記等はないが、『東寺観智院金剛蔵聖教の概要』に記された書誌的事項や掲載写真の筆跡から見て観智院本に間違いはない。このほか、田中本と観智院本との関連という点では、『江都督納言願文集』について、山崎誠氏が『続群書類従』の底本となった観智院本が田中本に当たらないかと推定されている¹⁵。しかし、続群書類従本にある延享五年(一七四八)修補奥書は田中本にない。虫損未判読箇所の不一致もあり、同一本とすることは出来ないだろう。田中本と観智院本とは親子の関係にあると見た方がいいのではないだろうか。

真言系寺院旧蔵が明らかなものには「勸修寺大経蔵」の朱方印のある『極楽寺殿仮名御消息』(143)もある。田中本にはほかにも真言系の書目が多くあり、奥書が残されているものも少なくないが、現時点ではその旧蔵者を明らかにすることは出来なかった。

一方、天台系では青蓮院門跡尊純法親王筆の『令旨等古案雑々』(149)『叡岳雜記』(153)、曼殊院の蔵書印のある『系図略』(308)がある。禅宗系では南禅寺塔頭慈聖院旧蔵の『興国南禅記』(144)、相国寺光源院旧蔵の『臥雲日件録抜尤』(448)、妙心寺雜華院旧蔵の『臥雲日件録』(166)がある。社家のものとしては、春日社関係の明応七年(一四九八)の『春日社家日記』(218)、同九年の具注曆紙背に書かれた『春日社頭移殿

御帰座日記』(221)や、賀茂社司によって書かれた神道書『三十番神之本縁』(32)『榎八ヶ口訣・諸神系図譜・神道』(53)『日本書紀神代下』(388)がある。

③ 公家の記録類

田中本には清華家以下の公家諸家の記録類も多数含まれており、院政期〜室町期の日記自筆本をはじめとする善本も少なくない。

まず最初に触れておかななくてはならないのが、神祇伯を世襲した花山源氏白川家の自筆日記群であろう。伯家記録の大部分は現在宮内庁書陵部に所蔵されており(大正一〇年献¹⁶)史料の翻刻を付した曾根研三『伯家記録考』も刊行されている。ただ、書陵部に自筆本が残るのは鎌倉時代後期の『業頭王記』断簡と室町時代前期の『雅業王記』断簡を除くと、すべて江戸時代のもので、平安時代から室町時代にかけての歴代の日記は『伯家五代記』として抄出本が知られるのみであった。その『伯家五代記』のもととなった自筆日記が田中本に伝存する『頭広王記』七卷(296)『仲資王記』八卷(298)『業資王記』五卷(314)『忠富王記』四卷(299)である。書陵部本『伯家五代記』の天和二年(一六八二)卷末識語には、この記が伯家にわずかに残った正記より抄出したものであることが記されている。そこで、その所収年次と田中本とを比較すると、『頭広王記』は永暦二年(一一六一)分一巻が欠失、『忠富王記』は明応七年(一四九八)・同九年・永正二年(一五〇五)の三巻分が欠失している。『仲資王記』『業資王記』については『伯家五代記』が作られた天和二年以降の欠失はない。なお、『資益王記』は自筆本六冊が東京大学史料編纂所に現蔵されている。

『業頭王西宮参詣記』(488)も伯家旧蔵の自筆本である。業頭王記は宮内庁書陵部に正安三年(一一三〇)三月二二〜二四日の記事が自筆断

簡として伝わり、写本も存在するが、それらはすべて正安三年の後二条天皇即位関係¹⁸⁾のもので、この『西宮參詣記』の写本は知られていない。業顯王の日記が『伯家五代記』に収録されていないことを考えると、少なくとも江戸時代前期の段階においてまとまった日次記は伝わってはいなかったのかもしれない。

勸修寺流藤原氏の諸家の記録類にも善本が多い。江戸時代前期の勸修寺家であって、家蔵記録の整理に努めた勸修寺経広の修補奥書・外題のあるものが『三長記』(40)、『吉統記』(44)、『大理秘記』(46)、『中右記部類』(47)、『三席御会記』(22)の五点、ほかに勸修寺家旧蔵本としては経広が書写・作成した『三長記』(40)と『三長記惣目録』(40)がある。この勸修寺家旧蔵の『吉統記』は書陵部所蔵柳原本の奥書に「右吉統記、経長卿記、正記歟、殊勝之一巻也、勸修寺侍従被借之間、暫時馳筆了、明和五年四月廿四日(花押)」とある「殊勝之一巻」に当たると見られ、柳原紀光が言うように経長自筆(浄書)の可能性が高い。これら勸修寺家旧蔵書のうち、『三長記』、『大理秘記』は甘露寺親長の手を経て勸修寺家に帰したもので、『三席御会記』も実名を憚る人名表記から甘露寺家の人物によって書写されたものであることがわかる。京都大学文学部博物館の勸修寺家旧蔵記録に甘露寺親長筆の記録類が多く含まれていることを考えあわせると、親長筆『山槐記』(17)や『甘露寺忠長記』自筆本(90)も勸修寺家に所蔵されていたと見てよいだろう。甘露寺家の記録が勸修寺家に移ったのは、桃山期に甘露寺家が勸修寺晴豊の二男経遠によって継嗣されたことなどに起因すると思われる。また同様に一門間の養嗣子関係により万里小路時房の日記が一五世紀後半には勸修寺家に伝わっていたことが知られており、時房自筆の『建内記』(44)も勸修寺家旧蔵と考えられなくもない²¹⁾。この一門の記録としてはほかにも『経俊卿記』自筆本(230)、中御門宣秀・宣光自筆の日記(91・95)、宣秀筆の可能性のある『大嘗会記』(17)、『禁秘御抄』(33)がある。『経俊

卿記』自筆本は書陵部所蔵伏見宮本に一六巻、陽明文庫に一巻が存しているが、本書を含め、その伝来については不明な点が多い。また中御門家の記録類について、『宣胤卿記』自筆本は京都大学の勸修寺家旧蔵記録中に伝来しているが、田中本の中御門家関係記録が勸修寺家から出たものかどうかという点は保留しておきたい。

山科家旧蔵の記録類は七点を数え、文書類や歌集などにも山科家旧蔵のものが多数ある。山科家の記録類は江戸時代後期に柳原紀光によって整理補修、書写された後、明治のはじめに山科家より流出し、現在、一部が東京大学史料編纂所・宮内庁書陵部・京都大学等に所蔵されている。山科家には雑掌が記した記録『山科家礼記』(『山礼記』とも称す)があり、自筆本一四冊が書陵部に伝わっているが、田中本にも自筆本二冊が含まれている。そのうち大沢久守自筆の『文明十八年雜記』(45)はすでに存在が知られていて『史料纂集』の底本にも利用されているが、『康正三年雜記』春夏記(89)はこれまで紀光の抄出本でしか知られていなかった。後補表紙には「家司重康記」とあるが、内容から見ると記主は重康の父大沢重能である。なお二冊とも現表紙は紀光によって付されたものである。山科家雑掌の手になるものとしては文明一四年・長享三年の『年貢請取帳』(92・93)もある。また、217には『言国卿記』の自筆断簡が『大染金剛院殿御記』、『中山孝親卿記』などととも合巻されているが、京都大学図書館所蔵『言国卿記』自筆本の当該部分には異筆で「右三枚脱丁之所、件二枚正記柳原大納言紀光所持の自筆本断簡二紙彼卿、以正記令模写之了」と落丁部分を柳原紀光所持の自筆本断簡二紙によって補った旨が記されている。したがって、この『言国卿記』断簡については柳原紀光の旧蔵であって、彼による修補時あるいはそれ以前に山科家より流失したものであろう。ほかに山科家旧蔵の記録類には顯言筆の『山槐記』(170)、『三種神器渡御儀』(250)、山科忠言奥書の『難波宗建自筆隨筆』(16—1)がある。

田中本の中には紀光を輩出した柳原家の蔵書印が捺されているものが二点あり、嘉禄二年(一二二六)の書写にかかる『白馬節会次第』(81)には「柳原文庫」の朱方印、『自将軍吉宗公注進書目録』(358)には「柳原庫」の朱方印が捺されている。また『保足蔵書目録』(359)は「自将軍吉宗公注進書目録」と同筆と見られる。柳原家の旧蔵書というわけではないが、書陵部所蔵の柳原本の親本となったものに、前記勸修寺家旧蔵本『吉統記』や、『公武年代記』(44)『本朝世紀』(45)、後述する『任大臣大饗記』(29)などがある。

先に述べた柳原紀光旧蔵の『言国卿記』断簡とともに成巻されている『中山孝親卿記』(217)には修補紙裏継目に印文不明の黒丸印が捺してある。⁽²²⁾それと同じ印は『中山大納言親綱卿記』(37)『除目聞書』(219)『補任歴名』(255)『尊勝院供養記』(474)にも捺されている。このうち『補任歴名』は人名表記から中山家の人物によって書かれたと見られる。『親綱卿記』の端裏に記されている「蟬冕魚同」とは中山家伝来の記録類を集めた書籍名で、元禄書写の彰考館本(『歴代残關日記』所収本の親本)などが知られている。その中には217大染金剛院殿御記も書写されており、中山家の家記を中心としたこれらの記録類が『蟬冕魚同』の原本の一部である可能性は高からう。

『入木道伝道書類』(354)として一括されている一帖・八冊の史料群や『公事根元』(162)『本朝皇胤紹運録』(165)『禁秘抄』(370)は、いずれも江戸時代の書写本で、それぞれ「華山蔵書之印」「華山院図書」など花山院家の蔵書印が捺されている。花山院定誠筆の『三長記』(403)に添付されている田中教忠筆の勘文には「明治十三年八月廿四日、花山院家蔵古本類、書林北川善兵衛若林茂助買得而鬻之、依買之、筆者家伝略注之了、田中教忠」と朱書されており、花山院家旧蔵書は田中本にあって入手時期・経路などがわかる稀な例である。

同じ清華家のものとしては、三条実美の一見奥書のある『山槐記』

(292)が三条家の旧蔵と知られる。現在は五冊一括となっているが、第五冊の元日節会部類記は今城定淳の書写本で、三条家に伝わった他の四冊とは伝来が異なる。ほかに三条家旧蔵の明証は欠くものの、三条家にかかわる記録類として藤原実躬筆の『除目職事要抄』(212)、同じく実躬筆と見られている『大賞会記』(399)と三条実有筆の『名目鈔并官位相当』(30)がある。『除目職事要抄』は、『除目申文抄』(統群書類従)と同じく一世紀の記録類をもとに編纂された除目の参考書で、本奥書には藤原長兼の著作であるとの所伝を載せており、『長兼蟬魚抄』とも呼ばれている。⁽²⁴⁾本書は内閣文庫所蔵の写本の祖本に当たる善本である。

村上源氏久我家の記録類には、中院通秀筆で久我通博奥書の『姓抄并名字抄』(303)、久我晴通筆の『姓氏』(304)があり、中院家のものには『中院通村自筆本』(439)として一括されている除目・即位関係記録八冊と『中院通茂自筆記』(339)がある。ほかに『掌中曆』(353)は菊亭家旧蔵、『古事記』(168)『先代旧事本紀』(169)は下冷泉家旧蔵、『本朝統文粹』(40)は日野西家旧蔵、『延喜式』(74)は土御門家旧蔵である。『江家次第』(295)は飛鳥井家の所蔵であったことが箱書よりわかる。

地下家のものとしては、壬生家旧蔵の記録類六点と平田家旧蔵書を中心とする『讓即部類』一括がある。『西宮記』(487)は壬生家本として知られる書陵部所蔵の室町期写本と本来一具をなしていたもので、慶長末年以後、明治二年(一八八八)宮内省に献上される以前に散逸した一巻の内の一巻である。⁽²⁶⁾『年中行事・北山羽林抄』(83)は天文二十一年(一五五二)の書写にかかると推定される。表紙には「左大史小槻宿禰」の署名と花押が据えられているが、壬生家文書の中に登辰の花押が残っていないこともあって花押の主は不分明である。『姓氏録』(29)『仁和寺諸院家記』(87)『山門三院記録』(150)の表紙や奥には壬生忠利が署名しており、⁽²⁶⁾これらも壬生家旧蔵の記録類である。蛇足ながら、この『姓氏録』と慶長二〇年

(一六一五)・元和二年(一六一六)壬生孝亮書写の『年代記改元并東大寺七重塔供養記』(22)の原表紙には壬生を意味すると思われる「任性」の文字が記されている。

一方、『讓即部類』(336)は寛永七年(一六三〇)の明正天皇や同二〇年の後光明天皇即位儀の参考とするために蔵人所出納平田職忠が集写した鎌倉時代〜江戸時代前期の即位関係記録とその転写本が中心で、江戸時代中期の平田職直書写のものもある。ただし「結城家蔵」の朱方印のある『光格帝御即位次第』(336-19-1)や「中尾」の黒印のある『大嘗会便蒙』(336-16)など数点は田中教忠が『讓即部類』として一括した際に混入したものである。出納平田家の文書記録類は明治三四年(一九〇一)に宮内省に一括献上されており、『讓即部類』所収の平田家旧蔵記録類はそれ以前に流出したものと見られる。

① 学者・収集家の記録類

田中本の中には江戸〜明治時代の国学者・故実家などの旧蔵書も含まれており、教忠と同好の志との交流を示す史料も残されている。

教忠は呉服商の家を継ぐ立場にあったが、家業より読書を好み、一九歳の時に国学者谷森種松(のちの善臣)に入門した⁽²⁷⁾。田中本の『浄蔵法師伝』(366)は入門の二年後、安政六年(一八五九)に種松が書写した本である。後年、山科家旧蔵の『三種神器渡御儀』(250)を入手した教忠は南朝の研究者としても知られる善臣に教示を求めた。善臣は伏見宮本の中より『南山御出次第』『三種靈宝自南山入洛記』を写し取り、教忠に送った。明治三年(一八九八)七月二十七日のことである。教忠はその写を『三種神器渡御儀』の巻末に継いで成巻し、送られてきた封筒もそれに添えて保管した。

西村兼文は『画家墳墓記』『京都古事談』などの著作をもつ人物で、

『興福寺蓮成院日記』(97)の袋には教忠の筆でこの書を兼文より寄贈された旨が記してある。国学者並川誠所の集書活動を記す『並川五一日記』(390)は兼文による明治二〇年の書写本であり、『難波宗建自筆考聞録』(16-2)に捺された「西村家蔵書印」の朱方印も兼文のものかと思われる。

田中本には、その著者や筆者、あるいは内容について教忠氏が調べた事柄を首尾などに書き入れたり、別紙に記して張り付けているものが多数あるが、『造伊勢三所太神宮宝基本記』(484)には徳治二年(一二〇七)の文書が料紙に使われている本書が国学者橋本経亮の旧蔵書であることを経亮の随筆『橋窓自語』を引用して考証している。

ほかに、『後照念院殿装束抄』(33)は江戸時代中期の故実家壺井義知『齋齋嘶余』(357)は本草家松岡恕庵、『菅儒侍読臣之年譜』(363)は松平定信、『民部省図帳』(294)は国学者上田百樹、『破八ヶ口訣・諸神系図譜・神道』(53)は中崎良胤の旧蔵にかかることが蔵書印よりわかる。また『令集解』(231)については山田清安の旧蔵書と見られている⁽²⁸⁾。藤貞幹や山田以文の作った印譜・拓本集もあり、藤貞幹の『弘利古瓦譜』(323)には明治二三年に教忠が採集した拓本二枚が貼られている。

おわりに

これまで田中本の記録類についてその旧蔵者に注目して述べてきた。最後に旧蔵者不明のもののうち、注目すべき記録類について若干触れておきたい。

『菅芥集』(210)は鎌倉時代前期の追善願文を収録したもので、奥書には享祿元年(一一二八)に談読したとあり、表紙には「房阿本」との記載もある写本である。この書名は『国書総目録』にも掲げられておらず、他の写本の存否は不明である。書名からすると菅家儒家の作文集か

とも思われる。内容は中原親能や大江広元らが願主となった追善願文など『大日本史料』にも収録されていないものばかりで大変興味深い。

『春玉秘抄』(41)は春除目についての儀式書で、完本はこれまで知られておらず、田島公氏の研究によって始めて唯一の完本である本書の存在が注目された⁽²⁹⁾。全貌は未翻刻であるが、成立・書写の過程を詳細に記した本奥書はすでに田島氏の史料紹介があり、儀式作法や中世の儀式書の成立を考える上でも貴重な素材となっている。

『出陣次第』(42)には「大夫尉寿栄」による弘化三年(一八四六)の修補奥書があるが、この記録が興味深いのはそれ以前の伝来で、表紙裏にこの書を「当家之秘伝」とする相模国玉繩城主北条氏勝の識語があり、表紙には父氏繁の花押も据えられている。氏勝は後北条氏滅亡後も徳川家康のもとで下総国岩富の城主になった人物で、その墓所は現在の千葉県佐倉市内にある。

『任大臣大饗記』(290)は長禄二年(一四五八)七月二十五日の足利義政の任内大臣大饗に関する記録で、本文中の「内大臣予」という記載などから見て記主は足利義政と見られ、近年、書陵部の柳原家旧蔵新写本『義政公記』によって翻刻が行われている⁽³⁰⁾。田中本の『任大臣大饗記』は書体などから判断して室町期を下らず、その書様を見る限り、自筆原本と断じて誤りないと思われる。ただし、記主足利義政自筆とするには問題点がある。それは一具と見られる『任大臣大饗雑具目録』(291)と筆跡が似ている点である。義政が雑具目録まで書いたとはとても思えない。しかも足利義政の自筆は和歌懐紙や扁額しか残っておらず、筆跡の比較が出来ない難点もある。そのため筆者(高橋)には本書の性格をどう見てよいものか判断がつかかねていた。ところが、柳原紀光の『砂巖』を見ていたところ、注目すべき記事を発見した。『砂巖』に収められた『義政公記』康正元年(一四五五)八月二十七日条に紀光が「慈照院贈相国義政公記、依彼命業忠草進之云」との勘文を付していたのである。

これは義政を記主とする日記の草案が義政の命により清原業忠の手で書かれたことを意味するものであろう⁽³²⁾。同じ義政の日記『任大臣大饗記』についても、義政を記主として清原業忠が書き、草進したものだとする、まさに草案の体であることや長禄二年の大饗に際して注進された永享四年(一四三二)の『任大臣大饗雑具目録』と筆跡が類似していることも整合的に理解できる。『続史愚抄』編纂のために膨大な書籍を集めて研究し、しかも本書『任大臣大饗記』を書写して柳原本『義政公記』を作成した紀光の勘文である。信ずるに足るものがある。なお、『大將軍御着陣并大臣大饗記』(271)は清原業忠が記した足利義政大臣大饗記を含む義満・義教の大臣大饗の記録を集めたもので、先の『任大臣大饗記』とほぼ同じ時代の書写にかかるものと見られる。

以上、本稿では田中本の調査の中で筆者が得た知見を、教忠の収集以前の旧蔵者に着目して述べてきた。筆者の能力と時間的制約から明らかに出来なかったことや、推定を重ねた上に独断を下したところも少なくなく、誤りも多々あるかも知れない。しかし、『田中種氏旧蔵典籍古文書』所収記録類目録とあわせて、田中本にどのような記録類が含まれているかが一応明らかとなったことで、田中本の記録類が研究者に利用され、各記録の書誌・内容の研究が図られて、田中本の史料群としての性格についても、より明らかにされることを望みたい。本稿がその礎石の一つとなれば幸いである。

(国立歴史民俗博物館非常勤研究員)

註

(1) 一九八九年から九一年にかけて四五〇点を購入し、一九九〇年には指定文化財を中心とする三九点が文化庁から管理換えされた。ただし、田中教忠の旧蔵典籍中もとても著名な国宝『日本書紀』巻第一一応神紀、および重要美術品「諸観音図像」・同「藤原成範家集」などは含まれていない。川瀬一馬「教忠翁の古書・古文書蒐集と考証雑記について」(後掲『田中教忠蔵書目録』)によれば、田中忠

三郎から龍門文庫に譲られた書籍や、安田文庫を経て川瀬氏が現蔵するもの、戦後売却されたものも多数あるようである。

- (2) これらが田中穰氏の手元にあった一九八二年、川瀬一馬氏によって『田中教忠蔵書目録』が作成されて、田中穰氏が私家版として発行されている。本稿もその成果によっている点が少なくない。
- (3) 安達直哉「田中家旧蔵本『醍醐雜事記』巻第一」(佐藤道子編『中世寺院と法会』法蔵館、一九九四年五月)、古瀬奈津子「田中本春記」について(『国立歴史民俗博物館研究報告』五〇、一九九三年二月)。
- (4) 山本光正・小島道裕「永禄六年北国下り遺足帳」(『国立歴史民俗博物館研究報告』三九、一九九二年三月)、海老名尚・福田豊彦「六条八幡宮造宮注文」について(『同』四五、一九九二年二月)。
- (5) 吉岡眞之「田中本『令集解』覚書」(『古代文献の基礎的研究』吉川弘文館、一九九四年一月)、田島公「土御門本『延喜式』覚書」(門脇禎二編『日本古代国家の展開』下、思文閣出版、一九九五年一月)。
- (6) 田中本の文書類のデータベース化が進んでおり、近く公開の予定である。
- (7) 田中穰「教忠と忠三郎の小伝」(『田中教忠蔵書目録』)、佐和隆研「醍醐寺古文書・聖教調査の足跡」(『醍醐寺文化財研究所研究紀要』一、一九七八年一月)、三成重敬「醍醐寺三十五年」(『同』九、一九八七年三月)。
- (8) 川瀬一馬「教忠翁の古書・古文書蒐集と考証雑記について」(『田中教忠蔵書目録』)。
- (9) 東京帝国大学所蔵本といわれる本の行方は現在不明であり、『群書解題』は関東大震災で被災している可能性もあるとしている。なお、統群書類従本と東京大学史料編纂所架蔵謄写本は、ともに文化八年慧岸書写の奥書を有する。
- (10) 『田中教忠蔵書目録』。
- (11) 陽明叢書(思文閣出版)による。
- (12) 「阿不幾乃山陵記考証」と改題して『考古界』五一六(一九〇六年一月)に発表された。なお、「阿不幾乃山陵記」と田中教忠との関係については玉利勲「墓盗人と贋物づくり」(平凡社、一九九二年四月)に詳しい。
- (13) 『昭和法宝総目録』(『大正新修大蔵経』別巻)所収。
- (14) 京都府立総合資料館編『東寺観智院金剛藏聖教の概要』(京都府教育委員会、一九八六年三月)。
- (15) 「六地藏寺蔵『江都督納言願文集』について」(『六地藏寺善本叢刊』三、汲古書院、一九八四年七月)。田中本を見ることが出来なかった時点で推定であるので、致し方ない点を申し添えておく。
- (16) 宮内庁書陵部編『図書寮典籍解題』歴史篇(養徳社、一九五〇年二月)。以下、書陵部蔵本については同書および『図書寮典籍解題』統歴史篇(養徳社、一九五一年三月)の記載によった。
- (17) 一九三三年『伯家五代記』の翻刻は一九六七年刊行の『統史料大成』(臨川書店)にも転載されていた(現在の『増補統史料大成』からは除かれている)。
- (18) 書陵部紀要四七『内乱史研究』一七(一九九六年五月)所収のダイゴの会『正安三年業頭王西宮参詣記』上の解説(桜井彦執筆)。
- (19) 川瀬一馬氏は、弘安六年(一二三三)の奥書と文明一二年(一四八〇)の奥書の筆跡が相似していると述べて文明頃の模写の可能性を示唆されている(『田中教忠蔵書目録』)が、筆者(高橋)には奥書の筆跡が同筆とは見えず、総合的に見ても弘安六年の書写本を文明一二年に甘露寺親長が入手したものと判断してよいと思われる。
- (20) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 建内記』の解説。
- (21) 田中本には万里小路家旧蔵の記録も含まれており、『岡屋関白兼経公記』江戸時代中期写本(202)には「万里蔵書」「尚房」の蔵書印が捺されている。
- (22) 217の中では「中山孝親卿記」断簡二紙の裏のみに印が捺されており、両端の印は半分しか残っていない。217は、原蔵者から流出したこの「中山孝親卿記」の断簡を得た者が、同じような断簡である『言国卿記』などとあわせて成巻したものであろう。『言国卿記』を所持していた柳原紀光か、現在の装丁を施した田中教忠かのどちらかによるものと思われるが、吉岡眞之氏の「ご教示」によれば書陵部の柳原本にこの印は見あたらないとのことであるから、教忠が収集した断簡を成巻したものと見てよいだろう。
- (23) 田中教忠が「大嘗会記」を実躬筆との見解を示し、川瀬氏もこれに従っているが、その根拠は示されていない。『除目職事要抄』や『大日本古記録』の口絵にある「実躬卿記」自筆本と筆跡を比較すると疑念もある。「大嘗会記」は「三長記」の紙背を利用して書かれているが、この「三長記」についても、川瀬氏は「三条長兼自筆」とされている(『田中教忠蔵書目録』)。その根拠は示されていないが、「三長記」「大嘗会記」とともに自筆だとすると勸修寺流藤原氏中の家の家記正本が閑院流のいわゆる三条家に伝わって料紙に用いられたことになり、当時の家記正本の継承に関する意識・習慣(拙著『日本中世の家と親族』吉川弘文館、一九九六年七月)の常識を越える。あるいは長兼、実躬ともに「三条」の称号が用いられたことから生じた川瀬氏の誤解があるか。
- (24) 時野谷滋「律令封祿制度史の研究」(吉川弘文館、一九七七年八月)、細谷勘資「長兼鯉魚抄」と「魚書奉行抄」(『国書逸文研究』二三、一九九〇年一〇月)。
- (25) 北啓太「西宮記の書誌」(『西宮記研究』一、一九九一年三月)。
- (26) 歌集にも忠利筆のものが五冊(189~193)ある。
- (27) 田中穰「教忠と忠三郎の小伝」(『田中教忠蔵書目録』)。
- (28) 吉岡眞之「田中本『令集解』覚書」(注(5)前掲)。
- (29) 「田中教忠旧蔵本『春玉秘抄』」について『奥書』の紹介と検討を中心に(『日本歴史』五四六、一九九三年二月)。

- (30) 森田恭二「宮内庁書陵部蔵『義政公記』について」(『帝塚山学院短期大学研究年報』四〇、一九九二年十二月)。
- (31) 図書寮叢刊、明治書院、一九九四年三月。
- (32) 康正元年八月二十七日条本文に「予」などの第一人称の語句は見えないが、明らかに義政を記主として書かれており、紀光の『統史愚抄』にも『義政公記抄』として引勘されている。
- (補) 本稿成稿後、末柄豊氏の「『言讐記』記主考」(『日本歴史』五八二、一九九六年一月)に接した。その中で末柄氏は仁和寺心蓮院旧蔵本が高山寺を経て前田家に入ったと考えられている。田中本の心蓮院旧蔵典籍文書類も高山寺を経た可能性があろう。

【付記】 本稿執筆に際しては、本館歴史研究部の益田宗氏・吉岡眞之氏、東京大学史料編纂所の高橋慎一朗氏より有益なご教示を得た。記して感謝の意を表したい。